

月刊

2019

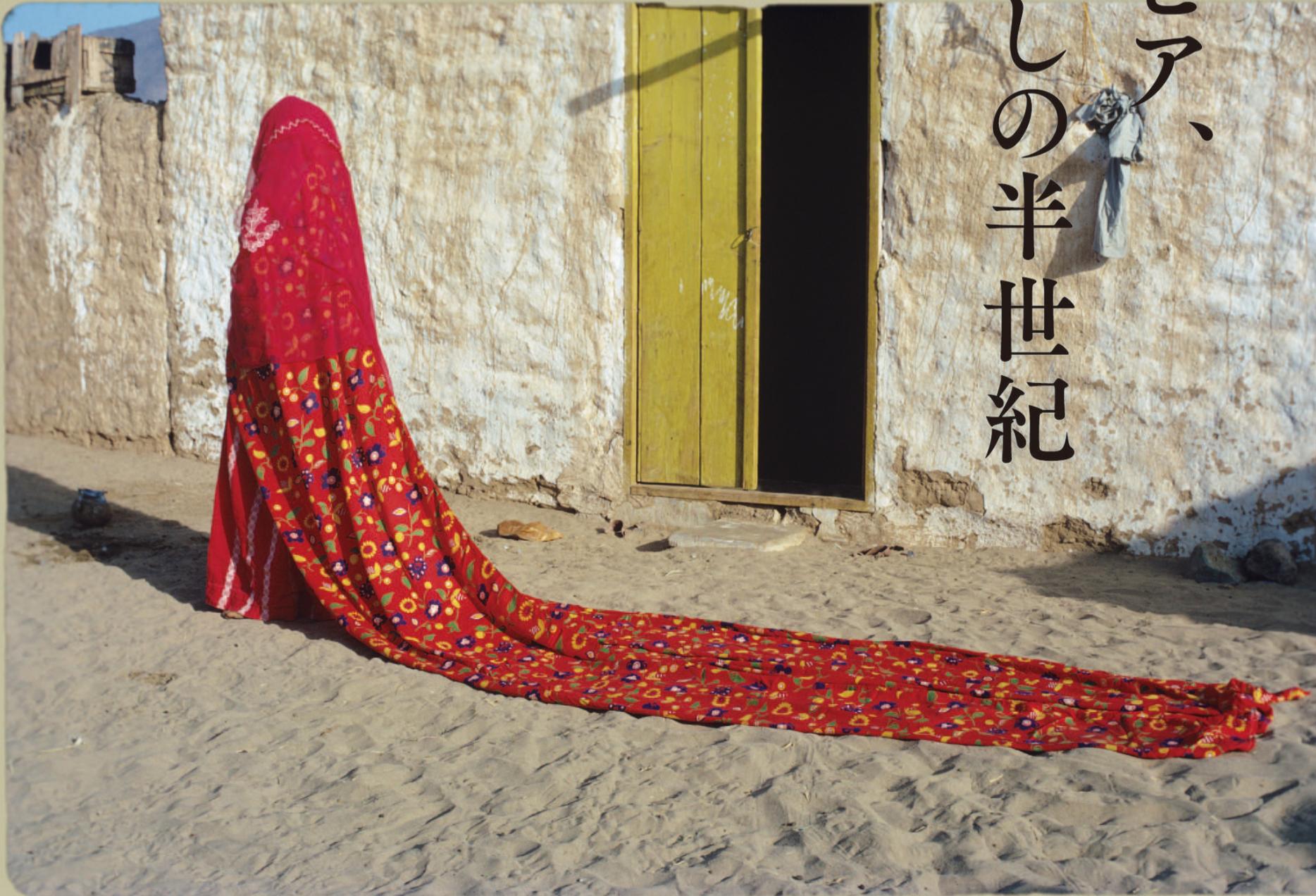
6
月号

みんぱく

特集

サウジアラビア、 女性の暮らしの半世紀

ワーディ・ファーティマの人びと 縄田浩志
半世紀前の被写体女性に会う 河田尚子・藤本悠子
衣装はカラフル、リサイクル、リバイバル 郡司みさお
装身具に見る生活の変容 遠藤仁
片倉もこの人間像 片倉邦雄
「ゆとろぎ」の概念と片倉もこの 西尾哲夫



物語の円環

森見 登美彦

プロフィール
1979年奈良県生まれ。小説家。京都大学農学部卒業。同大学院農学研究所修士課程修了。2003年『太陽の塔』（新潮社）で第15回日本ファンタジーノベル大賞を受賞しデビュー。2007年『夜は短し歩けよ乙女』（角川書店）で第20回山本周五郎賞受賞。2010年『ベンギン・ハイウェイ』（角川書店）で第31回日本SF大賞受賞。2018年『熱帯』（文藝春秋）は第160回直木賞候補に挙がるなど著書多数。

少年時代、週末には家族で万博公園へ出かけた。

自然文化園の北口から入ってすぐに「森の舞台」という一角があつて、いつも我々はそこで遊び、母の用意してくれた弁当を食べたものである。その幸福な少年時代、強烈な印象を与えられたものが二つあつて、ひとつは「太陽の塔」であり、もうひとつが「国立民族学博物館」だった。当時の私にとって、太陽の塔は世界の中心に屹立する謎そのもの、国立民族学博物館は森羅万象を網羅した「驚異の部屋」といふべき場所だった。二〇〇三年に出版したデビュー作のタイトルが『太陽の塔』であり、同作に国立民族学博物館が登場することからも、影響の大きさをご理解いただけたらと思う。

小説家としてデビューして二六年経つ。

最新作『熱帯』は、自分にとって小説とは何か、物語とは何かという疑問そのものを小説にしてやろうと企てた作品である。構想に悩んでいた時期に出会ったのが『千一夜物語』だ。「シャハラザードが語る」という枠組みの中で無限に増殖していく物語群は、物語というものの生命力

を感じさせるし、その複雑怪奇な成立史にも心惹かれた。驚いたのは、『千一夜物語』の研究者でもある西尾哲夫先生が国立民族学博物館におられたことである。国立民族学博物館といえば少年時代の私を圧倒した「驚異の部屋」ではないか。自分にとって小説とは何かと思ひ悩んでいるとき、私は『千一夜物語』と出会ったのだが、その出会いは少年時代の思い出の扉を開いたわけである。運命を感じた私は西尾先生のもとへ取材に出かけ、なんとか『熱帯』を書き終えることができた。

二〇一九年二月、国立民族学博物館で西尾先生と対談イベントを開催した。

小雨の降る午後、久しぶりに国立民族学博物館を訪ねたとき、デビュー作『太陽の塔』から最新作『熱帯』へとつながる大きな円環が閉じていくように感じられた。伏線をさかのぼれば、三〇年以上前の少年時代へ辿りつく。ずいぶん長い時間をかけて伏線を回収したものだ。『千一夜物語』の成立史がひとつの物語であるように、『熱帯』の成立史もまた（きわめて個人的な）物語である。

月刊 みんなぱく

6月号目次

- | | |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
物語の円環
森見 登美彦</p> <p>2 ワーディ・ファーティマの人びと
——半世紀の変化をおって
縄田 浩志</p> <p>4 半世紀前の被写体女性に会う
河田 尚子・藤本 悠子</p> <p>6 衣装はカラフル、リサイクル、リバイバル
郡司 みさお</p> <p>7 装身具に見る生活の変容
遠藤 仁</p> <p>8 片倉もとこの人間像
片倉 邦雄</p> <p>9 「ゆとろぎ」の概念と片倉もとこ
西尾 哲夫</p> | <p>10 〇〇してみました世界のフィールド
屋根裏散歩者の夢想
佐藤 浩司</p> <p>12 みんなぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相
泣く子をだまらずアイヌのお化け
齋藤 玲子</p> <p>16 みんなぱく回遊
ガラス絵とガラスアイコン
三島 禎子</p> <p>18 シネ倶楽部 M
サーミを捨てサーミを生きる
——「サーミの血」
庄司 博史</p> <p>20 ことばの迷い道
ことばの藪知らず
吉岡 乾</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|

特集／サウジアラビア、

女性の暮らしの半世紀

サウジアラビアに暮らす人びとの等身大の日常生活、特に女性の暮らしの変遷については、いまだ「ベールに覆われた」ままである。本特集では六月から開催の企画展に連動し、サウジアラビアの女性の生活文化の変遷と、半世紀前に同地を訪れた文化人類学者・片倉もとこの人物像について解説する。

ワデー・ファアティマの人びと——半世紀の変化をおって

縄田 浩志

秋田大学教授
片倉もとこ記念沙漠文化財団代表理事
民博特別客員教授

ワデー・ファアティマ

アラビア半島は国土の大半が乾燥した沙漠で、雨が降ったときだけ水が流れる季節河川がある。侵食された谷筋は、アラビア語でワデー(ワジ)とよばれる。「涸れ川」と訳されることから、水がない印象を受けるが、実際は地下水が流れていることが多く、比較的水に恵まれた場所である。

サウジアラビア西部ワデー・ファアティマ地域は、「水と緑に恵まれた」オアシスとして古くからその存在が知られていた。また、イスラームの聖地メッカと紅海の港ジェッダの中間に位置することから、多様な人びとが出会い、豊かな文化が育まれてきた。

乾燥地アラビア半島のオアシスに生きる女性たちは、どのような変化を経験してきたのだろうか？

古写真から見える生活世界

一九六〇年代末、急激な社会変化を迎えた同地で、片倉もとこ(国立民族学博物館名誉教授、一九三七～二〇二三)は、当時ほとんど不可能と思われた長期調査を二年にわたっておこなった。その後一九八〇年代にも同地を複数回、再訪している。

片倉は、世界各地のアラブ・ムスリム社会において広く現地調査を実施し、中東における文化人類学的・人文地理学的研究を切り拓いた先駆者である。サウジアラビア、ワデー・ファアティマ地域で定着がすすむ遊牧民社会を浮き彫りにした英語版 *Bedouin Village* (一九七七年) とそのアラビア語版(一九九六年)は、この地域の歴史的背景、経済システムの変容、親族関係などの社会的側面を初めて明らかにした民族誌として高い評価を受けた。

一面として蘇らせる。その研究プロセスを、来場者と共有していきたいと考えている。

「五〇年経って一番の変化は？」

ワデー・ファアティマ地域の年配の女性たちに「五〇年経って一番の変化は何ですか？」と聞いてみると、「住まい」という答えが返ってきた。一間だけの家やテントに住んでいたのが、幾部屋もある広い家に住むようになったことだという。

その次にあげたのが、「水くみに行かなくてよくなったこと」であった。乾燥地に適応してきた人間の歴史において、長距離の移動には家畜の皮製の水ぶくろ、定住地では土製の水つぼを使うのが長く一般的であった。一九六〇年代は生活用水を井戸でくんでいたが、配水車と水道の普及で井戸はやがて使われなくなった。井戸への水くみで女性が頭上にかけて運ぶ容器は、一九六〇年代にはブリキ缶へ、一九七〇年代にはプラスチック製へと変化し、今では水道

の蛇口をひねればよくなった。当時、井戸は水くみに来る男女の出会いの場でもあったが、今はそのようなこともなくなってしまうのである。



ブリキ缶で水を運ぶ女性(KM559、撮影：片倉もとこ、撮影年不明)

「みられる私」から「みる私」へ

ワデー・ファアティマにおける女性たちとの出会いを通じて、片倉は「みられる私」ではなく「みる私」としての女性像に気づいたという。「サウディアラビアのベールは、うすい黒い紗のようなものでできていて、顔を顔にもかけます。(中略) 砂よけ、紫外線よけにもなりますが、これをかぶると、わたしのほうから外は大変よく見えるのです。しかし、向こうからわたしの顔は、シワもシミも、全体の顔もよく見えないのです。(中略) 向こうからこちらをよく見えない、ということには、ときめくような「匿名の解放感」があります。サウディアラビアの女性たちは、匿名の解放感をエンジョイし、ショウ・ウインドウにならべられて、値ぶみされる商品になることをきっぱりとこぼんでいる、ということでしょう。(中略) 「みられる女性」から「みる女性」への変身は、わたしたちにもなにか教えてくれるような気がいたします」(『旅だちの記』二〇一三年、中公論新社、三二九～三三〇頁)。

サウジアラビアの女性は黒いベールで顔まで覆い隠されることにより社会のなかで不自由に暮らしてきた、という一定の理解が存在している。しかしながら、片倉が提起した「みる私」という視点に寄り添って、当時現地で撮影された貴重な写真を手がかりに、この半世紀の生活世界の変遷をおっていくと、個性的な女性の一人ひとりの姿も、浮きぼりになってきた。

次頁以降は、企画展実行委員六名が、衣装、装身具、人物といった展示内容の柱について、そして片倉もとこの人間像と研究キーワードについて解説する。



女性の日常生活を写した写真とそのなかに写るモノの同定。左上から時計回りに飾面、クッション(肘掛け兼枕)、ナツメヤシ製の敷物、頭・髪覆い(KM2397、撮影：片倉もとこ、1968～70年)

本企画展では、片倉が現地でも撮影した貴重な写真を手がかりに、半世紀後に実施した最新の追跡調査の成果を交えながら、物質文化をとおして、ワデー・ファアティマに生きる人びとの生活世界の変遷を、女性に焦点をあてて、たどっていく。

片倉が撮影したモノクロ写真に、手作業をする女性の姿をとらえた一枚がある(右頁下)。女性が顔を覆う飾面、体にまとう衣装、床に置かれた生活用具、そして手作業により作りあげているモノなどが確認できる。飾面であれば鼻の部分にコインが配置されていること、頭や髪を覆う一枚布は、少し透過性があり、ところどころに花柄がついていること、床に置かれているのは枕にも肘掛けにもなるクッションであること、ナツメヤシの葉を帯状に編みこんで敷物を作っていることなどを、さらに読みとることが

できる。ナツメヤシは乾燥と高温に強いヤシ科の植物で、オアシスで栽培される代表的な作物である。果実(デーツ)を食用にするだけでなく、幹は建材に、葉はかごやうちわ、敷物などの生活用具を作るために用いられる。特に乾燥した葉を利用した道具作りは、女性が担ってきた。現在ではプラスチック製にとつかわり、ナツメヤシ製品を作ることができ女性の数も減ってきている。

展示場においては、古写真とそれに写り込んだモノそれぞれに対応した展示品を合わせて示すことにより、物質文化について詳しく解説する。半世紀前の暮らしを記録した貴重な写真である反面、白黒ゆえにわかりにくい被写体のディテールも、ある時期、ある場所に生きた、ある女性の等身大の日常生活の

半世紀前の被写体女性に会う

かわだ なおこ
河田 尚子
ふじもと ゆうこ
藤本 悠子
片倉もとこ 記念沙漠文化財団理事・事務局主事

片倉もとこは、一九六〇年代に急激な社会変化を迎えたワーディ・ファアティマにおいて、顔を覆う飾面が印象的な女性たちに出会った。最初は警戒され、砂をかけられたりもしたが、一人ひとりに焦点を当てた調査をおこない、顔の見えるつきあいを重ねた。その結果、著書や論文で彼女たちのエピソードを度々紹介し、多数の写真撮影し、それらは現地においても貴重な記録となっていた。

村人との関係の再構築

片倉は同地を、晩年に至るまで繰り返し訪れた。しかし残念ながら、本格的な再調査はおこなわないまま亡くなってしまった。二〇一五年にわたしたちが同地を訪れた際、片倉の著書に何度も登場した「ある女性」に会うことができた。彼女は親族を集めて大歓迎してくれ、五〇年前の調査当時に使っていたお気に入りの飾面や衣装を着て見せてくれた。

この女性に出会えたことにより、人びとの生活が調査当時と半世紀後でどのように変化しているのか、再調査できる兆しが見えてきた。そこでは、片倉が撮影した膨大な写真から、①半世紀後の成長した本人に会える可能性が高い子どもが被写体のもの、②著作に掲載されておりキャプションを手がかりにあらたな情報が得られそうなもの、そして③著作未掲載だが女性の暮らしを生き生きととらえているものを、被写体個人を同定する資料として計二〇〇枚

ほど選んでみた。このうち、著作に掲載された写真はごく少数であった。というのも、片倉は調査の際、相手との信頼関係を構築することを優先し、はじめのうちはカメラもテープレコーダーもノートもたずにいたという。特に写真については気をつかい、日本で出版された雑誌（『荒野に生きる女たち』『季刊民族学』一九八四年、二八号、一五頁）に掲載したときも、『あなたたちの想い出に、わたしがみられるのだから』と書いて撮らしてもらった写真は、約束を守って人にはみせていない。（中略）ここにおみせした写真でも彼女たちはいやがるかもしれないと思う。じつは、内心おどおどしているのである」と述べている。

村人と協働した被写体の同定

三年後の二〇一八年にワーディ・ファアティマを再訪することができた。しかし残念ながら、その女性には他界されていた。ご本人に片倉の撮影した写真を見ていただきお話を聞くことは、かなわなくなってしまったのである。それでも、彼女の子ども、親族の女性たちが集まってくれ、被写体女性の同定をおこなうことができた。四人が後ろ姿で写っている写真（本頁下）では、全員が親族とのことで皆の名前を見事に同定していった。左頁下の写真についても、後ろに写り込んでいた人物本人が義妹だと名乗り出たことから、亡くなった女性こそがその飾面の

女性であると確認できた。さらに、片倉が『アラビア・ノート』（筑摩書房、二〇〇二年）で紹介している、親の紹介ではなく恋愛結婚した女性も、その方であるとわかった。そして、その女性の長女は、母が片倉に飾面を買って贈ったことを教えてくれ、同時に母の遺品である衣装一式をわたしたちに託してくれた。そのひとつであった飾面が、本企画展のチラシを飾るとともに、展示品の顔となった。



飾面の内側から撮影者を見据える女性たち (KM0590、撮影：片倉もとこ、1971年)

一方で、二〇一九年に再度訪れ、写真の利用許諾を求めた際、義妹は自身の顔が特定できる形では使えないでほしいとわたしたちに話した。そして、その女性の息子は、写真のとおり、母の手にモザイクなどで加工することを条件に使用を許諾した。同定作業は被写体の子世代、孫世代にまでおよび、被写体個人、そして家族親族によっても、写真の使用条件が異なることがわかった。このように同定作業を現地の人びとともにおこなうことは、写真の情報価値を高めていくうえで重要であるといえる。

男性が見る女性の「姿」

片倉が調査中泊まり込んでいた一家の女性たちが写真の被写体をなかなか同定できずにいたところ、

当時一〇歳未満だった親族の男性が、飾面を着けたある女性を見て「これはわたしの母だ」とすぐに同定してくれたことがあった。素顔を知る女性よりも男性の方が、飾面を着けた女性の場合は見分けられることがあると認識した。これはわたしたちにとつてあらたな発見だった。

片倉は長年にわたるフィールドワークを通じて、女性たちは「みられる私」よりも「みる私」になりたいのだ、と気がついたという。女性同士では素顔のつきあいが基本で、他者から外見で見分けられることを意識しなくてよい。被写体が飾面を着けた女性であるとき、外見的特徴を見慣れている親族男性の方が、同定作業で意外な活躍をみせることもあるのかもしれない。



お気に入りの飾面を着けた女性とその義妹 (KM0584、撮影：片倉もとこ、1980年)



学校で授業を受ける女性たち (KM1035、撮影：片倉もとこ、1983年)

衣装はカラフル、リサイクル、リバイバル

郡司 みさお 片倉もとこ 記念沙漠文化財団理事

カラフルな衣装と気候風土

サウジアラビア、ワーディ・ファアティマに暮らす女性の衣装はかつて、じつにカラフルであった。外出時には頭や顔を布で覆い、たっぷりした外着を着て肌の露出を少なくし、強い日差しや砂の侵入、汗の蒸発を防ぐ。外着の裾には丈夫なキルトを付けて灌木のトゲから足を守る。一方、室内で着用する貫頭式の長衣（内着）は風通し、動きやすさの面でじつに快適だ。また、肌着（下着）は足首部分をすばませて蠍や蛇、虫、砂埃の侵入を防ぐと同時に、腰から太腿部分はゆったりとさせ熱がこもらない構造である。

このような気候風土に根ざした機能もあわせた女性の衣装は、さらにカラフルな色彩と模様をとり入れてきた。もともとサウジアラビアの女性の外着が黒一色というわけではなかったのである。

「もったいない精神」のリサイクル

女性衣装のひとつに、まるで日本の振袖のようなものがある。これは伝統的な晴れ着で祭事の際に着られていたが、一九八〇年ごろ姿を消したと考えられる。着物と同様に肩山には縫い目がなく「輪」になっており、前身頃と後ろ身頃を肩で縫い合わせる洋裁とは一線を画している。その一方、身頃や袖にマチをつけて立体的に仕上げる点は西洋式と似ている。そういう点では、東と西の中間と形容することもできる。

きる。また、無駄なく残布を使う継ぎ合わせ、

リサイクルし繰り返し使うキルト、裏地に小麦粉袋の布を流用することなどには、「もったいない精神」が垣間見られる。



振袖のような形状が特徴の伝統衣装（撮影：遠藤仁、2018年）

顔を覆う飾面ブルグアは、村により多様であった。装飾にも意味があり、三角刺繍には、家庭内での女性の安定という願いが込められていた。女性たちは飾面の部品として、平銀糸入りの組紐を使っていた。日本の帯締めとよく似たこの組紐は、特定の村の女性たちが内職で作っていて、定期的にメッカから商人がやってきては家々を回り買い上げていったという。

半世紀をへてリバイバル

男性衣装は地域差が小さく、この半世紀での変化もほとんどなかったと考えられる。それに対し成人女性の多くは、一九八〇年代に入ると外出時にはアバーヤとよばれる「統一された黒い外着」を着るようになった。当初は、生地を切ることなく生地巾いっぱい縫製した四角い形が主流だったが、徐々に動

きやすい袖付き、おしゃれな装飾付きへと移行した。また、室内で着用する内着についてもかつて人気を博していた小花プリントがリバイバルし、宗教行事の時期になると市場に並べられて彩りを添えている。太い毛糸やひもを細い糸で縫い付けて模様を描くコーチング刺繍などの装飾技術も、その仕様を変えながら現在の衣装に息づき、伝統は母から娘へ誇りをもって引き継がれてきた。

女性たちは言う、「アバーヤもブルグアもわたしたちのアイデンティティ」と。



結婚式に参列した晴れ着姿の女性（KM5574、撮影：片倉もとこ、1970～71年）

装身具に見る生活の変容

ベドウィンジュエリー

サウジアラビアを含めたアラビア半島の一部の女性たちが身に付けていた銀製装身具は、「ベドウィンジュエリー」とよばれている。

その特徴は、鑄造で作られた素体（造形の基礎部位）に、粒や線状の部品をろう付けし、さまざまな幾何学模様で装飾したものである。ろう付けとは、金属を接合するために、母材よりも融点の低い合金（銀製品の場合は銀ろう）を溶かして、母材を融解させずに複数の部材を接合させる技法である。

これらの銀製装身具の多くは、おもにイエメンのサナアのユダヤ系職人の手により作られていたとされている。サナア近郊は、アラビア半島有数の銀の産出地として知られており、銀細工職人も多く居住していた。ここ数百年程の政治動乱の影響で、銀細工職人はアラビア半島各地に拡散したが、現在



大きな装飾の首飾りを着けた女性（KM5563、撮影：片倉もとこ、1968～70年）

も銀製装身具が各地で作られ続けている。

ベドウィンジュエリーは、派手な外見から、注目されることは多い。しかし、実際にどのように使われていたのかはあまり知られていない。なぜならば、それらを身に付けていたのが、外部からの接触を極端に忌避する遊牧民女性であったからである。彼



女性用銀製腕輪一式。腕輪同士が触れ合い音が鳴る（左：H0100437、H0100435、右：H0100436、H0100434）

女たちを撮影したり、聞きとり調査をしたりすることは、非常に困難であった。それでも、装身具に関するある程度の特徴や意味は知られている。大きな装飾には邪視除けの効果があるとされ、緑や青（トルコ石）、赤（メノウ、サンゴ）、黄（コハク）といった色の石を組み合わせたたり、鈴やコインを付けて音が鳴るようにしたりすることが挙げられる。

再調査から見えた機能

装身具に関して、片倉の残した調査データを

再検討

しつつ、その半世紀後の追跡調査をおこなっている。現在はベドウィンジュエリーはほとんど身に着けられておらず、装身具を身に着ける意味などについても、若い世代にはほとんど継承されていないことがわかった。

例えば、片倉が収集した装身具には、鈴が付けられた首飾りや、音が鳴る指輪がある。筒状部品のなかに玉が入られ、振ると音が鳴る。ではなぜ、装身具が音を鳴らすのか。その理由を聞きとると、ワーディ・ファアティマ地域では、音を鳴らすことにより女性が自分の存在を知らせ、生活空間を異にする男女間の不用意な摩擦を避けるためであることがわかった。装身具は、身を飾ることのみに目を向けられがちであるが、少なくとも片倉の調査地では、このような社会的機能をもっていたことが確認できた。



大きな装飾の銀製首飾り。鈴が付けられている（H0100442）

遠藤 仁 現代中東地域研究 秋田大学拠点研究員

片倉もとこの人間像

妻、母、そして研究者

あの思いっきり明るい笑い声、惚れっぽく惚れられやすい人柄……人生の相棒として「一研究者片倉もとこ」の姿をふり返ってみる。

もとこは一九三七年奈良県で生まれた。父親の赴任に伴い上海の小学校で学んだが、太平洋戦争が激化し、米潜水艦に追われながら引き揚げた。もち前の国際性はそのころ培われたのだろう。津田塾大学時代に留学したアメリカでアラブの学生らと出会い、



サウジアラビアの高地ターイフにて水タバコで一服する筆者と片倉もとこ (KM2301、撮影者不明、1969年)

中東地域に関心をもちようになつた。わたし

が同じ交換学生計画の先輩で、(外務省の)アラビア語専門家となつたことなどすべてが絡み合い、一九六三年

カイロで結婚、それ以来二人三脚で主として中東地域で活動した。



サウジ北部で株式会社バスコがおこなっていた三角測量に同行した片倉もとこ (撮影者不明、1968年)

もとこは一九六〇年代後半、二児の母となり、かつ東京大学大学院の博士課程に籍を置き、三角測量実習や農漁村で住み込み調査をおこないながら、アラブ地域社会の研究を目指していた。住まいの公務員住宅の壁には、難解なアラビア語が書かれたカードを小児の手の届かない高さにベタベタ貼って覚えていた。わたしがサウジアラビアの大使館勤務の内示を受けたとき、もとこは現地調査を考えたが、厳しい戒律、男女隔離といった障害が多い同社会では、王族女性と接触するうちに何か得られるかも……ぐらしいか期待していなかった。

そのころ、同王国は紅海沿岸のジェツダからメッカ方向に出れば道路の両側斜面に黒い遊牧民のテントが点在し、翌日にはさっと消えている風景が常だつ

た。もとこは移動する彼らを辛抱強く追跡し、東方に七〇キロメートル離れたワーディ・フアーティマにたどり着いた。調査の手がかりを掴んでからは、ジープでも沈没する沙漠の悪路を何度も通つた。

研究に捧げた生涯

当時は人口調査なども進んでおらず、厳しい宗教的戒律や閉鎖性からフィールド調査における情報提供者の確保は困難だったが、サウジアラビア王国労働省傘下の社会開発センター所長の温かい庇護を得て、もとこは家族構成、家畜保有数、定着化、土地所有、水利灌漑の実態などを綿密に調査した。本人がいつも述べていたが、自分が女性というのみならず、既婚者であり母親であることが遊牧民の信頼を得る大切な要素となつた。一度調査村に入れば、七〜一〇日は起居をともにし、その間沙漠で満天の星を眺めたり、詩歌のやりとりを楽しんだりした。一方、子どもを日本の実家に預けて現地調査する時期もあり、成果はあつても、うつ状態に落ち込んだこともあつた。

さらに村民から、「友人」としてのつきあいなのか、「研究者」としての情報収集なのか、疑問を抱かれることもあつた。研究者の宿命とはいふものの、一人二役のジレンマに悩みながら、一研究者として「和して同ぜず」を貫きとおし、生涯イスラームの理解に努めつつも一定の距離を置いていた。これは「情の人」、もとこにとって辛い試練であつたかもしれない。

「ゆとろぎ」の概念と片倉もとこ

移動文化と価値観

片倉もとこが「ゆとろぎ」ということばをはじめて使用した著作は、『イスラームの日常世界』(岩波書店、一九九一年)だった。片倉は長年のフィールドワークに基づく経験から、アラビア語で「休息」を意味する「ラーハ」ということばが、日本語の「くつろぎ」だけではなく「ゆとり」という意味をも含



部屋でコーヒーを飲みながら余暇を楽しむ様子 (KM3002、撮影：片倉もとこ、1970年)

んでいることに気づいた。そしてアラブ世界の「ラーハ」がつつみ込んでいる概念をあらわすために「ゆとろぎ」ということばを造りだした。この「ゆとろぎ」という価値観をはぐくんだものは、片倉もとこが強調した「移動文化」だった。

片倉はアラビア半島の沙漠でベドウィン(アラブ遊牧民)と生活をともにし、そのときの経験をもとに「移動文化」の想を得たという。ベドウィンは、水や草を求めて移動する暮らしを通じて移動に適した生存戦略を培い、独自の価値観を形成していった。片倉の著書『イスラームの世界観——「移動文化」を考える』(岩波書店、二〇〇八年)によれば、対人関係の所作や情報を重要視する商人的性格にはこのような価値観が投影されている。

「ゆとろぎ」と現代世界

わたしが調査をしてきたエジプトのシナイ半島に暮らすベドウィン社会には、よそ者を迎え入れるためのダヒールとよばれる制度がある。例えば、保護を求めてテントに入ってきた人をいったんダヒールとして受け入れた場合、ホスト役の主人はどのようなことがあるとも、そのよそ者を保護しなくてはならない。故郷のテイクリトに逃げ込んだイラクのサッダーム・フセイン元大統領の捜索が難航したのも、彼が地元に住民にダヒールとして受け入れられていたからだつた。

このようなダヒール制度は、生活空間に明瞭な境界を引かない移動文化がはぐくんだ集団意識を反映したものであり、「ゆとろぎ」の概念にも通じている。言い換えれば「ゆとろぎ」とは対人関係における緩衝地帯を指しており、本来は「あそび」の空間を意味する「ラーハ」というアラビア語の原義にも対応している。



肘掛けにもたれてくつろぐ男性 (KM3174、撮影：片倉もとこ、1968〜70年)

「ゆとろぎ」は、移動の民ベドウィンの世界観から抽出された「移動文化」というキーワードと結びついてイスラーム世界を読み解く有効な概念ともなる。グローバル化が進んだ現代世界は単一の価値観で覆われようとしているが、一方ではそれに逆行するかのように民族紛争や文化衝突が頻発している。このような状況にあって共生関係を築いていくためには、移動による世界観をもつ人びとが他者との共生戦略としてはぐくんできた「ゆとろぎ」をめぐる思索が大きなヒントを与えてくれるだろう。

片倉 邦雄 片倉もとこ記念沙漠文化財団評議員会議長

西尾 哲夫 民博グローバル現象研究部

〇〇してみました世界のフィールド

屋根裏散歩者の夢

佐藤 浩司

民族建築学者（2019年3月に本館を退職）



屋根裏に潜り込んでみえた

スンパ島で調査中の勇姿（インドネシア、1987年）

世界各地のさまざまな建築について研究を積み重ねてきた筆者。今号はそんな筆者が、インドネシアの民家調査時の写真とともにエッセイをお届けする。屋根にその特徴があるインドネシアの民家から見えてきた住まいのあり方とは。

夢の世界と現実

子どものころの夢は忍者になることだった。小学校の行き帰りに忍者走りをしたり、忍術道具やら忍者食を作ってみるくらいは当時の子どもなら誰でもやっていたに違いない。テレビのなかの忍者たちは部屋にいながら後ろ向きにひよいと跳び上がると鴨居に足をかけ、するりと天井裏に消える。もちろんこれも真似をした。ただし、それは鴨居に足をかけるまで。家のなかでも天井裏や床下は忍者や物の怪の世界、まっとうな人間様の立ち入る領域ではないのである。と、子どもながらに感じていたのだろう。

日々の厳しい鍛錬を怠ったせいなのか、忍者にはなれなかったけれど、床下と屋根裏は仕事場になった。いや、泥棒ではありません。頭巾のかわりにヘッドランプをかぶり、手裏剣のかわりにシャープペンと消しゴムを

「非常識」の探究

なぜ、そこまでして苦渋に満ちた(?) 屋根裏散歩を繰り返すのか?とおおかたの読者は訝るであろう。

未知の対象を前にして、その内部がどうなっているかを知りたい、と思いつくのは人間がホモ・サピエンスたる所以ではなからうか。医学の進歩も工学の発展もこの情念なくしては不可能だった。人類のはしくれたるわたしもご多分に漏れず無謀な好奇心にかられたものである。それは戦争中の『建築雑誌』を飾った「大東亜建築グラフ」のなかの民家写真であった。大学でまなぶ建築学の常識ではけっして実現できないであろう建築造形の数々。とんでもない形をした屋根を見て、その内部構造を知りたいという思いに、いや、魔が差したといったほうがよい。まだインターネットもない時代、本を探しても情報は得られなかった。自分の眼で確認するしか術がなかったのである。

裏から見る表の世界

ところで、屋根裏から覗く人間界ほど滑稽なものはない。屋根裏に宿るといふ祖先の霊(つまり俺様のことか?)にむけて儀礼や供養を繰り返すのはきまって男たちの特権だ。無意味な会議にあげられ、仕事と言いつつながら飲み歩く現代人と二重写しになって心がいたむ。そもそも祖先の霊が人間界に意思をつたえるはずもなく、要は誰かの主張をおすため祭りに上げられている傀儡にすぎないわけである。いい面の皮だ。さて下手な夢想もこのへんで。最後に散歩で得られた教訓をば。

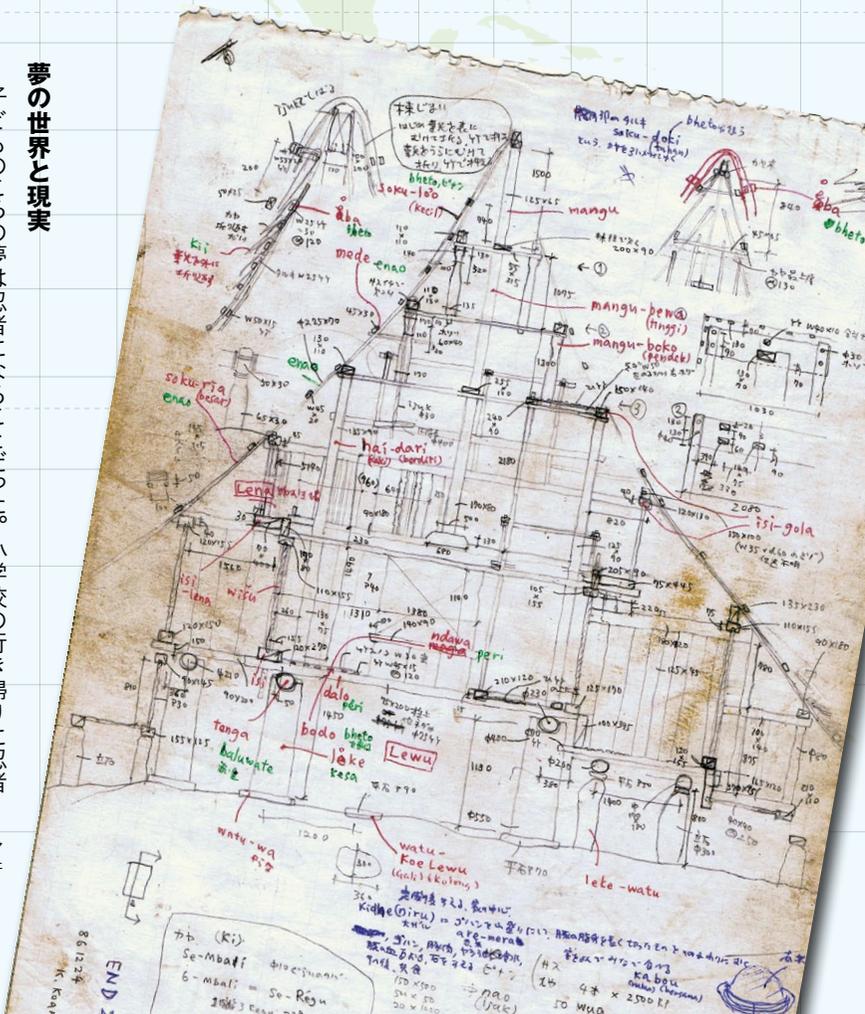
住宅はかならずしも人間が快適に住むためにあるのではないという教え。屋根裏、この得体の知れない空間こそ、人間中心に凝り固まった現代住宅が是が非でも取りもどすべき領域の象徴なのである。

片手に、もう片方の手には野帳、懐にコンベックス(メジャー)を忍ばせて、垂木を抱きかかえるように小屋組をよじのぼる。油断は禁物。草屋根の屋根裏は曲者が呑気に散歩できるほど快適な場所ではない。もうもくと舞いたつ埃の堆積をかきわけ、まとわりつく蜘蛛の巣をはらい、囲炉裏からたちあがる煤にまみれながら、したたる汗と涙と鼻水に耐えての図面採り。不安定な格好のまま部材の寸法を測り、ノートに記入するのがいわば忍者にかわるわたしの仕事だ。

足下の人間界からは、大学まで出たのに可哀想ねえなどとひそひそ声で話すが聞こえる。運悪く屋食時にぶつかると(食事の)相伴?と(んでもない!) 歓迎されざる客とはかり、火をおこした囲炉裏の煙にまかれて暗い屋根裏で一人涙にくれるありさま。それでも屋根裏に首尾よく侵入できればよし。祖霊の宿る神聖な空間、家宝を安置する不可侵の場所など一蹴されて、宝の山を目の前に退散するしかないこともある。



氏族の中心家屋サオ・リアのなかは屋でも暗い。屋根から洩れる太陽光とヘッドランプの明かりだけがたよりだ(インドネシア、フローレス島、1986年)



フローレス島オ族のサオ・リア(大きな家)の美測図。煤と汗(と涙?)の染みに注目(インドネシア、1986年)

3次元CGで見せる建築データベース「東南アジア島嶼部の木造民家」 <http://htq.minpaku.ac.jp/databases/3dceg/>
本稿で紹介した家屋の詳細については、本館ホームページで公開中の上記データベースをぜひご覧ください。

観覧料改定のお知らせ

2019年6月6日(木)より、本館展示観覧料を左記のとおり改定いたします。なお、特別展観覧料はその都度、別に定めます。何卒、お願い申し上げます。

◆2019年6月4日(火)まで

一般	高校・大学生	中学生以下
420円	250円	無料

◆2019年6月6日(木)から

一般	大学生	高校生以下
580円	250円	無料

各種割引等につきましては、みんなくホームページをご覧ください。

特別展

『驚異と怪異——想像界の生きものたち』
なぜ人類は、この世のキワにいるか。もしれない不思議な生きものを思い描き、形にしてきたのか？ 奇妙で怪しい、不気味だけどかわい、世界の霊獣・幻獣・怪獣が大集合！ 現代のアーティスト・漫画家・ゲームデザイナーたちによるクリエーター制作

も紹介し、妖怪やモンスターの源泉にある想像と創造の力を探ります。
会期 8月29日(木)～11月26日(火)
会場 特別展示場



海の死霊
トビウオ漁用釣り具
(ソロン 諸島)

企画展
『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』
片倉もここ(本館 名誉教授)が半世紀前に撮影した写真を手がかりに、色鮮やかな物質文化からサウジ女性の生活世界の変遷をたどります。
会期 6月6日(木)～9月10日(火)
会場 本館企画展示場



花飾りのついたクフル(顔料)容器

第17回音楽の祭日2019 in みんなく
1982年にフランスで、夏至の日(6月21日)にみんで音楽を楽しむ「音楽の祭典」がはじまりました。みんなくでも、世界のさまざまな楽器を使って「音楽の祭日」を祝います。
日時 6月23日(日)10時15分～16時35分
(10時開場)
会場 特別展示館 本館エントランスホール
※申込不要、参加無料展示をご覧ください。
方は、展示観覧券が必要です。

お問い合わせ先
企画展「音楽の祭日」担当
電話 06-6878-8210
(土日祝を除く9時～16時)

みんなく映画会 第45回ワルドシネマ「サーミの血」

独自の言語と文化を持つサーミ人の少女が、国の分離政策によって差別的な扱いを受け、自らのルーツと葛藤しながら成長し生きる姿をおして、民族のアイデンティティについて考えたいと思います。
日時 6月16日(日)13時30分～16時30分
(13時開場)
会場 特別展示館(定員350名)
※申込不要、要展示観覧券
※参加券を当日11時から特別展示館入口にて配布



©2016 NORDISK FILM PRODUCTION

夏休み子どもワークショップ
「ワイルドワークに挑戦！——マイナス40度の世界に生きる人びとのくらし」
夏休みの自由研究はみんなくでチャレンジャー！みんなくで1日研究者になって「ワイルドワーク」を体験してみよう。
日時 7月28日(日)
10時30分～16時(10時20分集合)

みんなくセミナー

日時 6月15日(土)
13時30分～15時
(13時開場)

会場 特別展示館
※参加無料、申込不要、定員200名
※参加券の配布なし
第492回
物質文化から見た沙漠社会——アラビア半島オアシスの半世紀



ブリキ缶を頭に寄せ井戸へ水くみに向かう女性

講師 西尾哲夫(本館 教授)
縄田浩志(本館 特別客員教授、秋田大学 教授)
遠藤仁(現代中東地域研究 秋田大学 拠点研究員)
アラビア半島の「水と緑に恵まれた地」を舞台に、およそ半世紀前に撮影された写真と人文地理学、文化人類学的記述をてがかりに、物質文化の特質と生活世界の持続と変容について考えます。

みんなくウィークエンド・サロン 研究者と語る

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域(国)の最新情報」「みんなくでの展示資料」について分かりやすくお話しします。

6月9日(日)14時30分～15時30分
本館企画展示場、ナヒひろば
「みられる私」から「みる私」への変身——ベールの内からみる世界へ
講師 西尾哲夫(本館 教授)
縄田浩志(本館 特別客員教授、秋田大学 教授)

6月30日(日)14時30分～15時15分
本館展示場(東アジア展示場(中国地域の文化))
中国文化の中の「動物」たち
話者 韓敏(本館 教授)
7月14日(日)14時30分～15時 本館ナヒひろば
「サウジアラビア半島」にみるハラルな若者文化
話者 相島葉月(本館 准教授)
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

■杉本良男、松尾 瑞穂 編
『聖地のポリティクス——ユーラシア地域大国の比較から』
風響社 5,000円(税別)
聖地はいつも「満員御礼」。聖地を成り立たせているものは何なのか。「聖性」の議論を超え、本書では、インド、中国、ロシアそれぞれの聖地について、その物語性や観光化、宗教や国家イデオロギーの介入、「再」聖地化といった現代の諸相に切り込む。人々にとって聖地とは何かを考究する、民博共同研究の成果。



■長谷川清、河合 洋尚 編
『資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から』
風響社 5,000円(税別)
歴史や文化はどう消費されるのか。ヒトや集団の文化実践によって紡ぎ出された「歴史」は、市場経済や政治権力によって加工され、より大きな文脈として再配置されていく。本書は、現場の視点からそのさまざまな水流を汲み取り、全体としての動態を見極めようとする試みである。民博共同研究の成果。



刊行物紹介
■韓敏 編
『家族・民族・国家——東アジアの人類学的アプローチ』
風響社 5,000円(税別)
21世紀の中国研究に新たな視座を提示。ダイナミックな転換期に立ちつづける中国。本書は、家族のディスコースとその実態、「民族」構築の理論的系譜、国家・社会関係のパラダイムという3方向からその動態を見据え、新たな分析枠組みを提示。日・中・韓・米、台湾、香港の人類学者による民博共同研究の成果。



国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会

会場 本館第5セミナー室(当日先着順・定員96名)
※会員無料(会員証提示)、一般500円
第490回 7月6日(土)13時30分～14時40分
企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」関連」
サウジアラビア女性の日常世界のいまむかし
講師 郡司みさお(片倉もここ記念沙漠文化財団 理事)
藤本悠子(片倉もここ記念沙漠文化財団 事務局 主事)

イスラームの聖地マッカ(メッカ)の近郊に位置するワディ・ファアティマは、「水と緑に恵まれたオアシス」でした。交易路沿いの都市遺跡がみられ、多様な人びとが出会い、豊かな文化が育まれた場所です。1960年代末以降、社会全体が急激な変化をむかえたなかで、文化人類学者の片倉もここが出会った女性たちはどのような日々をおくってきたのでしょうか？ 片倉の撮影写真と最新の調査成果と共に、サウジアラビア女性の50年の生活変化をたどります。
※講演会終了後、解説付きで企画展の見学会をおこないます(40分)。
【解説】 縄田浩志(本館 特別客員教授、秋田大学 教授)
※見学会にご参加の方は会員証もしくは展示観覧券が必要です。

東京講演会

会場 モンベル御徒町店4Fサロン(定員60名)
※会員無料(会員証提示)、一般500円
第126回 7月13日(土)13時30分～14時40分
「みんなく名譽教授シリーズ」
チワン(壮族)の文化の資源化の現状
講師 塚田誠之(本館 名誉教授)
チワン(壮族)は、中国の55の少数民族のうち最大の人口を有し、その多くが中国南部の広西壮族自治区に居住しています。歴史的に漢文化の影響を受容してきましたが、歌掛けやモチ米食品への嗜好性など独自性をも保持してきました。1990年代以降、中国の経済発展にともない、かつて男女の歌掛けの際に用いられた「繡球」が商品化され、高床式住居が観光資源として活用されるなどの変化が見られます。本講演では、こうした事例をつづじて文化の資源化について考えます。
※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。
※要事前申込、先着順

講師 大石侑香(本館 特任助教)
会場 本館展示場 第3セミナー室
対象 小学4年生～6年生
※要事前申込(先着順)・定員12名
参加費500円
※7月3日(水)応募受付開始

国立民族学博物館 国立科学博物館 共同企画展
『ピース——自然をつなぐ、世界をつなぐ』
会期 6月16日(日)まで
会場 国立科学博物館 日本館1階
企画展示室(東京・上野)
休館日 月曜日
主催 国立科学博物館
国立民族学博物館

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。



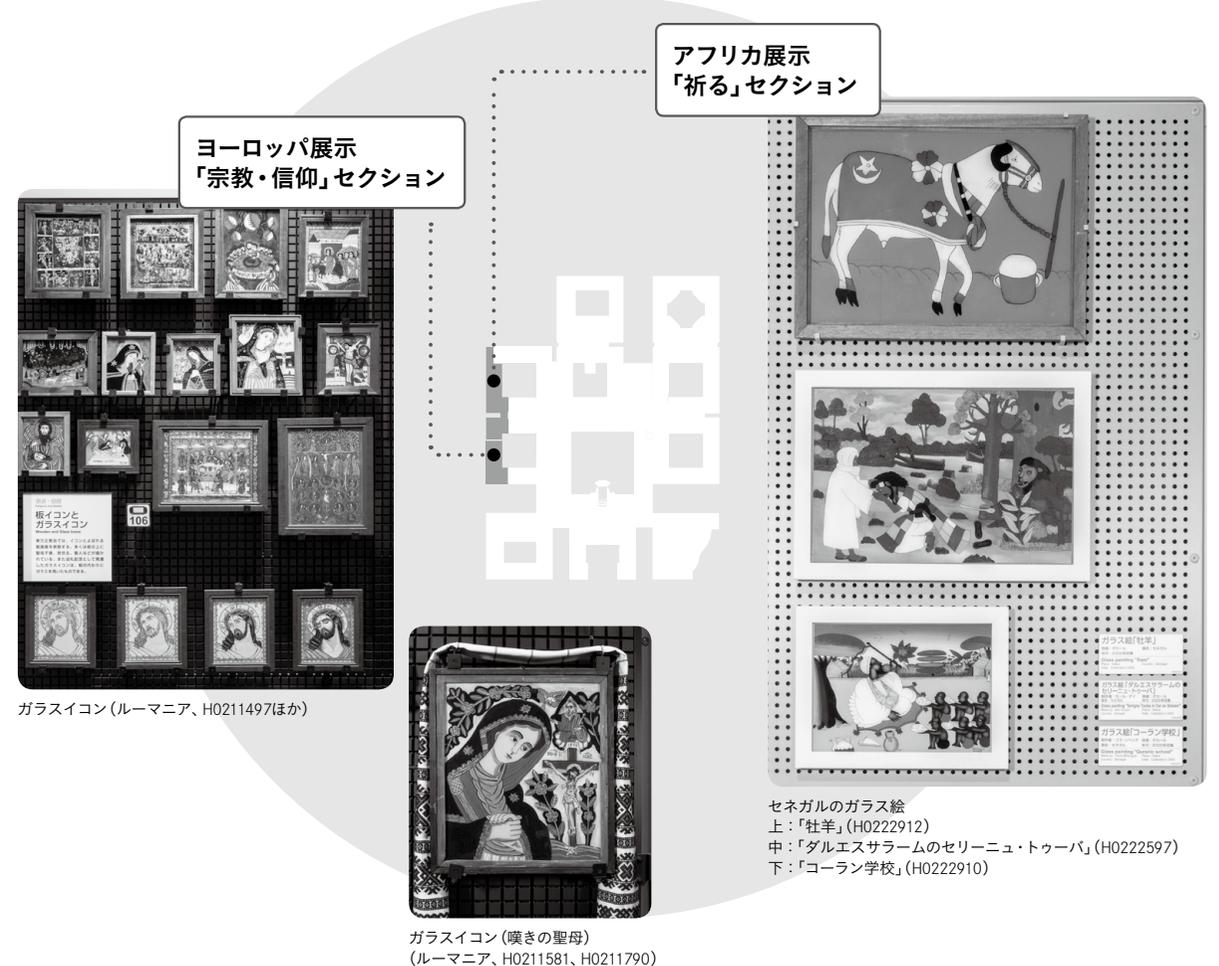
ガラス絵とガラスアイコン

民博 グローバル現象研究部 みしまていこ 三島 禎子



路上でのガラス絵販売(ダカール、2000年)

見えるという。他方、アフリカではセネガルを中心にガラス絵として独自の変遷をとげた。例えば写実性を排除しているという点では、手や頭、目などが通常より大きく描かれたり、濃淡のない原色の色使いが見られる。遠近法をあまり用いない平面的な構成と、画一化されたモチーフの描き方、そして繰り返し同じテーマが登場する点も、アイコンにその原型を見ることができ。しかし、ムスリムが大多数を占めるセネガルでは、ガラ



アフリカ展示
「祈る」セクション

ヨーロッパ展示
「宗教・信仰」セクション

ガラスアイコン(ルーマニア、H0211497ほか)



ガラスアイコン(嘆きの聖母)
(ルーマニア、H0211581、H0211790)

セネガルのガラス絵
上:「牡羊」(H0222912)
中:「ダルエスサラームのセリーニュー・トゥーバ」(H0222597)
下:「コーラン学校」(H0222910)

ス絵は写真の代わりに教祖を描き、イスラーム教団への所属を示すものとして受容された。それ以外のモチーフには宗教的な意味はなく、過去の『月刊みんぱく』や『季刊民族学』で紹介したように、むしろ装飾的なものとして発展した。アイコン画家にとっては、アイコンの制作そのものが宗教的な行為であり、制作に取り組む前に特別な修練と修行が必要である。画家としての署名も原則としてなされない。それに対し、セネガルのガラス絵は初期は無記名のものばかりだったが、しだいに画家独自の画風を表現した作品が生まれ、多くの画家が誕生した。これを現代アフリカのナイーブ・アートあるいはプリミティブ・アートなどと解釈する傾向もあるが、ガラス絵の特徴にアイコンの影響が色濃く残っていることを忘れてはならない。

海と砂漠を越えて

さて、なぜセネガルでガラス絵が発展したかを探るとき、セネガルが置かれた地理的位置が大いに関係している。アフリカ大陸の最西端で海からの利便性に長け、大西洋交易の拠点になり、西欧諸国の進出が盛んだった。フランスによる植民地支配では最初の総督府が置かれた地域でもある。地中海を接点としていたキリスト教圏とイスラーム圏の交流は、一足飛びに砂漠を越え

みんぱくの展示場には似て非なるものがたくさんある。人が移動し、それにもなつてモノが運ばれ、文化や文明が伝播していったことを考えると不思議ではないが、その思いもかけぬ類似性や差異の多様性に驚きや発見もある。モノの起源をたどってみると、人の営みと交流の歴史の一端が見えてくる。

アフリカ展示場に三点のガラス絵がある。ガラスの裏側から反転して描いている点の特徴である。画材がガラスであるという点からいえば、時代を問わず世界中にガラス絵は存在するが、アフリカのガラス絵には中央ヨーロッパのガラスアイコン(聖画像)の宗教的な様式が残されている。ヨーロッパ展示場にルーマニアのガラスアイコンが十数点置いてあるので、比べてみるとおもしろい。

宗教画か、アートか

ヨーロッパにおけるガラスアイコンの発展は、ガラスの大量生産とキリスト教とりわけ正教会の拡大と密接なつながりがあり、人びとが敬拝する対象として求められてきた。ガラスに限らずアイコンは神の光を象徴するとされ、影のない光に包まれた神が描き出される。また図柄に用いられる人物や動物、事物は写実性を排して抽象的に描かれ、同じ対象が繰り返し取り上げられる。神や人の顔に関していえば、どこから見ても同じような視線を投げかけているように



フォファナ作「踊り」(セネガル、H0222758)
人物を線で描くところに独特の画風があり、ガラス絵の概念を一新させた

た。また少し時代をさかのぼれば、サハラ砂漠の南端に位置するサヘル地帯では、一六世紀後半までサハラ交易をとおしてアラブ世界との交流が盛んであった。メッカへの巡礼は、人のみならず、さまざまな交易品が行き交う機会だった。このようななかで、アイコンがセネガルにもたらされ、イスラーム地域でガラス絵として独自の発展をとげたと思われる。現存するセネガルの古いガラス絵にはキリスト教のモチーフを描いたものがある。しだいにそれはイスラーム的に変容し、「画家」の誕生によって画風が変化し、「画家」の誕生によって画風が変化し、図柄の対象も多様になっていった。みんぱくで収集した三六五点のガラス絵には、人びとの生活や歴史の記憶などさまざまなものが描かれている。海外で展示会を開催する画家も出現し、今日なお変化し続けている。

セネガルのガラス絵は漫画的でユーモラスである。それでも、厳格な宗教の様式に則ったアイコンの影響を見ることができ。その変化の足跡に、人の交流の歴史があることへ思いを馳せながら見ていただきたい。



サーミを捨ててサーミを生きる

庄司 博史
民博 名誉教授

この映画を見終えた後、塞いだ気分が回復するまでしばらくかかったことをおぼえている。先住民族としてのサーミ人が国家の近代化のもとで受けてきた苦悶差別を、これほどの現実感をもって辛く悲しく描いた作品は初めてであった。

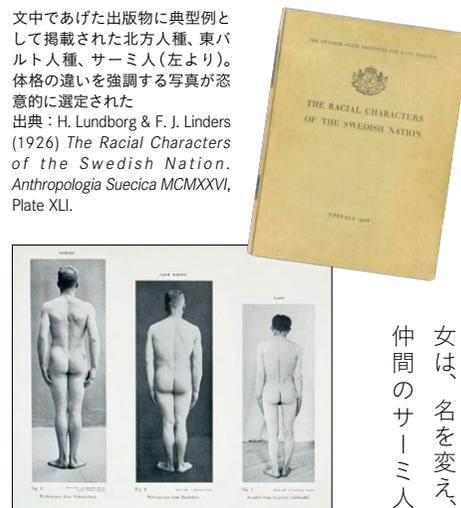
北欧の山地でトナカイを追う遊牧民として時折、牧歌的に紹介されるサーミ人。だが、彼らが北欧各国の近代化のなかで経験した試練は、地球上、各地で国家と多数派による支配や同化の構造が先住民に対してもたらしてきたものと大きく変わるものではない。サーミの歴史や文化にいくばくか興味をもつものには、作品のなかで展開する一連の挿話も、すでに史実として語られてきたものでもある。しかし、映画という仮想現実とはいえ、少女という一人の人格を通じてそれらを追体験するのはやさしいことではなかった。

「サーミ」を捨てるエレ・マルヤ

舞台は一九三〇年代のスウェーデン・ラップランドで、サーミ人がまだ盛んであったトナカイ遊牧に家族とともに従事していたころの話である。一四歳の主人公エレ・マルヤは、山地でテント生活をおくる家族からはなれ、夏からの数カ月サーミ人の子どものためのサーミ学校で妹とともに寄宿舎生活を過ごす。当時

サーミ人に対し独善的な隔離政策をとっていたスウェーデン政府は、彼らを遊牧者としてサーミ人の村にとどまらせる一方、子どもたちにはスウェーデン語を強要し、口をついて出たサーミ語にはスウェーデン人の女性教師が容赦なく鞭の罰を与えていた。

村民の嘲笑の視線のもと、厳格な寮生活で子どもたちがサーミ人であることに萎縮していくなか、教師を志すエレ・マルヤは、都会ウプサラへの進学を希望する。しかし、サーミ人は文明には適応できないとされていた当時、彼女にとって都会での進学の道は閉ざされていた。故郷とともにサーミ人であることを捨てる決心をした彼女は、名を変え、仲間のサーミ人



文中であげた出版物に典型例として掲載された北方人種、東バルト人種、サーミ人(左より)。体格の違いを強調する写真が恣意的に選定された
出典：H. Lundborg & F. J. Linders (1926) *The Racial Characters of the Swedish Nation*. *Anthropologia Suecica* MCMXXVI, Plate XLI.

られる。彼女の屈辱的な表情にはすでに権力に抗えぬサーミ人から離脱する決心さえも感じられる。

スウェーデン全土をカバーした調査はゲルマン人のなかでもっとも純粋とされた北方人種を頂点とする国民の人種分類の基礎となり、知能や性向、社会階層へと関連付けられていた。その過程で出された、サーミ人は頭骨の構造から文明にはなじめないという結論が当時の隔離政策の原因ともいわれ、東バルト人種に分類されたフィンランド人も二級人種の扱いを受けている。研究所のゲルマン人種に関する研究成果はやがてドイツの人種論のモデルになったとされるが、このような人種学の潮流は当時としては決して異端視されていたのではなく、むしろ時代の先端をいく科学とみなされていたようだ。研究所の代表的な出版物(一九二六年)にむけた『アメリカンアンソロポジスト』の書評はその実証性を評価するだけでなく、人種生物学研究所設立議案を投票なしで通過させたスウェーデン議会の英断を絶賛している。

この映画は、サーミを捨ててクリスティーナと名を変えた彼女が約六〇年後、妹の葬儀におとずれた故郷でふとよみがえる過去からかつての自分を追想していく形で展開するが、スウェーデン人として生きた六〇年間に何が起こったかは語られない。しかし妹の葬儀の場でサーミ語を拒否し、親せきと交わりうとしない彼女がすべての過去と絆を捨てて生きようとしてきたことは想像に難くない。彼女がかたくなに守ってきた「サーミを捨てる」という決心のみが彼女のサーミへのこだわりを語っているのかもしれない。



右：あこがれの都会ウプサラでのエレ・マルヤ
下：サーミ学校の子どもたち
(いずれも映画「サーミの血」より、
©2016 NORDISK FILM PRODUCTION)



を蔑むことでスウェーデン人社会へとけ込もうとする。しかし必死の努力にもかかわらず、彼女の外見とそれに対する好奇の視線はどこまでも付いて回る。匂いを消すため湖で髪とうなじを洗い、ことばを纏えない感情を即興的に表現できる叙情歌謡、ヨイクも封じることとで出自とサーミとしての背景を消そうとするエレ・マルヤに痛々しさを禁じえない。

スウェーデンの大罪

かつてサーミ人にむけていた民族差別政策は、今日、民主国家・福祉国家と評されるスウェーデンの歴史的汚点としてしばしば言及されており、現在、移民や少数派に対し進める寛容政策は過去への反省と贖罪ともいえる。しかし、スウェーデンがそれにとどまらない人類の尊厳にかかわる大罪に加担していたことは、この映画の潜在的なテーマとなっている。

サーミ学校の子どもたちは突如ウプサラからの来客を迎えさせられる。優生学と人種生物学の立場から健全な国民を守るという名目で一九二二年ウプサラに設立された人種生物学研究所の職員であった。子どもたちは家畜のように機器で鼻の高さや顔の幅などあらゆる身体数値を計測され、スウェーデン人の少年たちの視線を浴びるなかエレ・マルヤも衣服をはがされ写真を撮

ことばの迷い道

ことばの?を渡り歩く

ことばの藪知らず

よしおかのぼる
吉岡 乾

民博 人類基礎理論研究部

クレタ島の、ミノータウロスが幽閉されていた迷宮をご存知だろうか。彼の封じられていたそれは、ミューケーンイ語で「da-pa-ne-to」[「トキヤト」]、後に古代ギリシア語で「ラビュリントス [Labyrinthos]」とよばれていたが、英語での「ラビリンズ」の名が日本ではポピュラーだろう。

迷宮という、曾て一九八〇年代に流行ったような、入り組んだ、分岐が多くて行き止まりばかりの、道に迷わせるための構造を想像するかも知れない。いわゆる迷路である。けれども、こちらは英語では「メイズ」。ラビリンズとは別物である。なお、類似概念としてゲームなどで頻繁に登場する「ダンジョン」とは、地下牢のことだ。

迷宮は、方向を失わせるように右へ左へと迂余曲折するが、基本的には一本道で、目的地に近付いたり離れたりしてしまうような作りの構造物という。けれども、先行きの長さは計れずとも、決して道に迷うことはない。道に迷うことはできない。迷路とは理念が一八〇度異なっている。

他の分野と違わず、言語の研究は一筋縄ではないもの。そもそも、言語を調査するのに、言語を用いて探究しようとするのだから話が厄介だ。フィールド調査では、未知の言語を知るために、その言語の使用者と、調査者とのあいだで、互いに知っている別の言語を用いることが一般に多くある。そういった言語を、媒介言語という。例えば筆者は、ドマーキ語を知るために、ブルシヤスキー語を媒介言語として調査している。ブルシヤスキー語の調査は初めのうち、ウルドゥー語

を媒介としていた。

例えば話を平たくするために、英語を媒介に用いて日本語を調査すると考えてみよう。単語調査で、「ライス [rice]」を日本語で何と言うかと訊かれたら、何と答えるか。「米」か。だとしたら、「田圃に米が植わっている」とか、「ほかほかの米を食べる」などと、自然発語で言うだろうか。

何等かの言語現象が立ちあらわれたとき、それが対象言語の特徴なのか、媒介言語の招いた不具合なのか、留意する必要がある。

現代英語の二人称代名詞は、単複も男女も区別しない。「ユー [you]」を含んだ例文を和訳してくれと言われたとき、「あなた」と訳すだろうか。「おそれとも」「あなたがた」と訳すだろうか。「おまえ(たち)」「や」「君(ら)」は間違いか。幾つも幾つも訊かれて、毎度毎回、単数が複数かと区別して訊いたり、登場人物の関係性はどうかとかと伺って答えたりしなければならぬのは大変に億劫だろう。男女で動詞などの活用形が変わる言語なら、ユーの指す者の性別も重要だ。

言語の構造は奥深い。わけ入ってもわけ入っても未知が続く、八幡の藪知らずのように、踏み入れた者は二度と出て来れない、終着点へと辿り着けないのではないかと懼れるほどである。「だからこそ楽しい」などと言語学者が言うこともあるが、強がりでなければそれは、言語探究の道が闇雲な迷路ではなく、巨視的に、いずれ最奥部に行き着く迷宮の構造だと信じているからなのかも知れない。

編集後記

本号では、企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」と連動した特集をお届けする。この展示は、片倉もとこ本館名誉教授の研究や彼女の残した資料と密接に関係した内容である。特集の執筆者もそうした展示の趣旨を考慮して選ばれている。ひろく中東に対する興味関心をもつ方だけではなく、展示や収蔵資料を多面的に見るための一助になればと思う。

なお通巻501号となる本号からは内容を一部変え、新しいコーナーが始まっている。本館の展示場の改修後の私的見どころを紹介する「みんぱく回遊」と、ことばの不思議に迫る「ことばの迷い道」である。こちらにもご注目いただきたい。

最後に、小生は本号をもって編集長の役を終えることとなる。本誌2019年4月号の巻頭言に寄稿いただいた歌人・永田紅氏の歌に「人はみな馴れぬ齢を生きている」で始まる一首があったと記憶する。新しい仕事を始めるときには、その歌の制作意図や意味とは無関係に、そのことばが脳裏をよぎることがある。ともあれ、慣れぬ役割を無事終えて、今ほっとひと安心して。次号からは、南真木人編集長のもと新体制で進められていく。これからの『月刊みんぱく』にも引き続き読者の支援を請う次第である。(丹羽典生)

●表紙：サウジアラビア、ワーディ・ファータマ地域の未婚女性が着る外出用衣装スマータ (KM5578、撮影：片倉もとこ、1974年)

次号の予告

特集

「バスケットリー」(仮)

みんぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。

毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



月刊みんぱく 2019年6月号

第43巻第6号通巻第501号 2019年6月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 丹羽典生(編集長) 寺村裕史 三島禎子
南真木人 山中由里子 吉岡乾

デザイン 宮谷一 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 遊文舎

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通ください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKUofficial>

みんぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんぱくインスタグラム

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

みんぱくYouTube

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>

